

# 「文化」の力・その1(芸術)

企業経営漫談士 岡野実空

本来なら前回の「一般教養」に含めるべき、「文化」の領域。それは「科学」偏重の世の中を、「人間」らしく生きようとするとき、自分のみならず組織にとっても欠かせないもの。これから2回は、組織ミドル「人間力」強化のために、その「文化」を取り上げます。まず前半は、我が「ライフワーク」を事例に、「芸術」との付き合い方を考えます。(次回は「スポーツ」編)

## その1: 生活の糧

エジソンのような「仕事」を「趣味」にできる天才はともかく、私たち凡人にとって、「仕事」は「労働」。ときにはそれを離れ、「趣味」などの世界に身を置くことは、良い「気分転換」になります。

また自分にとって本当に大切な「趣味」は、優先順位を逆にし、その予定をまず押さえ、そこから逆算して「仕事」の段取りを考えます。私の場合は、東大寺「正倉院展」。現役時代、毎年10月下旬から11月上旬は、拠点を関西に置くことを関係者に声掛けしておいたため、現地の定例の仕事をこの時期に調整してくれました。おかげで関東に居住しながら、「趣味と実益を兼ね」18年連続で鑑賞することができ、いまは唯、感謝の言葉しかありません。

最も尊敬する小林一三翁は「演劇」でしたが、当時の私にとって、「正倉院展」とその前後に訪れる、奈良の寺社、仏像巡りが「生活の糧」だったのです。

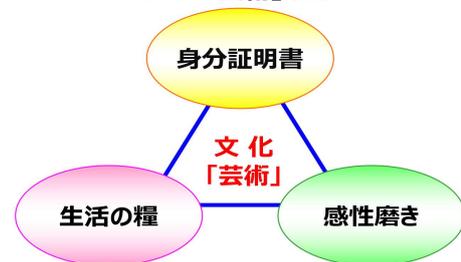
## その2: 感性磨き

「文学」や「美術」、「音楽」など、幅広い「芸術」の世界。いずれにせよ、それは製作者が「心」に感じたことを、さまざまな形で鑑賞者に伝えるもの。そのため製作者は、「自分」と「技術」を磨きます。一方鑑賞者は、それを受け取るべく、そのセンサーとしての「感性」を磨きます。「芸術」から得られる「感動」や「共感」は、その双方向「コミュニケーション」の質量によって決まるからです。

因みに「正倉院御物」でいえば、それが作られた時代の社会的な背景に始まり、発注者の意図、製作者の思いを理解しないと、それは単なる工芸品や書画の見学に過ぎません。その観点で振り返ると、当初の鑑賞など実に底が浅く、回を重ねるごとに増す「感動」の幅と深みは、毎年秋、奈良で自分の成長を確認する恒例行事となりました。

またそこから得られた気づきは、次々と「仕事」にも役立つようになり、その関係者へのフィードバックが、継続的な協力につながっていたのです。

Z-12 「芸術」の力



## その3: 身分証明

さて今回、ミドルという立場に絡み、一番強調したいのは、「芸術」が果たす自分および組織の「身分証明書」としての役割。またそれに深い「見識」を持つことは、こちらが単なる「営利」目的の「人」や「集団」でない、「品性」の証になるからです。

また企業幹部ともなれば、「仕事」はもちろん、それ以外の領域での「見識」を問われます。そのとき「芸術」は、その個人および組織の社会的な位置づけを判断する格好の材料となります。翻って考えてみるに、いま世界の中で、自国の「文化」すら理解できていない人間が、多様な人々の集団の中で身動きとれないのは当然のことといえます。

因みに、白鳳・天平は、国際化の時代。そこでさまざまな民族が、どう「コミュニケーション」をとり、どのように「協働」していたかを知ることは、いまの私たちに多くの示唆を与えてくれます。またその「御物」を見ながら、いまの世界で、「モノ作り」や「国際分業」のあるべき姿を考えることは、企業幹部への登竜門でもあります。

最後に、「せめて映画くらい観ましょう」、「せめて小説くらい読みましょう」は、「仕事人」ミドルたちに、私がセミナーで訴え続けた台詞です。

ミドルが支えてきた、我が国のさまざまな組織。  
ニッポン、危うし！ 突破口は、「文化」にあり！！

2021年3月15日 実空